

第二節 創業と守成 668ページ

第一項 創業は易く守成（しゅせい）は難し

【創業】 事業を始めること。また、事業の基礎を築き始めること。

【守成】 創業を受け継ぎ、事業の基礎を固めること。

古来「**創業は易く守成は難し**」といわれます。大きな夢や展望を描いて創業し、その後さまざまに困難に打ち勝って創業期を成功させたとしても、守成期にも成功し続ける保証は全くありません。創業よりも守成の方が難しいだけでなく、**双方で必要とされる成功の条件や道徳の質が大きく異なる**からです。創業においては、奮闘努力し、かつそれに加えて、ある程度の経営資源があれば成功は得られます。すなわち、事業の成功には**身体が強健であり、知識と勇気があって、はなはだしい不道徳を行わないなどの要素があればよい**のです。しかし、**成功を持続して事業を完成させ、さらに次の代にそれを譲っていくには卓越した品性が必要**です。したがって守成は成功よりも難しいのです。守成期に入った経営者は、創業期の順調さに安住してはなりません。「一国は一人を以って興り、一人を以って滅ぶ」といわれます。一人のすぐれた人物によって国は興隆し、一人のすぐれた人物を失うことにより衰亡するという意味です。国家や民族の存亡のみならず、企業や団体の栄枯盛衰は、一人、もしくはごく少数の指導者や幹部の資質にかかっているといえるでしょう。廣池の次の記述がそれを示しています。

《品性とは》「より良いものの考え方と行動が習慣となったもの」

「一つの事業に成功した人はみないずれも表面は温順に見えても、その精神の奥には強き高慢心、我慢心もしくは剛情ありて、生涯自分の思うことを押し通していこうとするのであります。これは第一は利己的本能の強きため、第二は創業と守成とに対する原理及び方法の区別を知らざるためであるのです。よってかかる御方は翻然（ほんぜん）その利己的本能を棄てて最高道徳的に心を入れ替え、もってその成功を全うすべきであります。近くは織田信長・豊臣秀吉・ナポレオン一世のごときみなその人固有の知能にて起り、しこうしてその人固有の知能にて滅亡したのであります」（『道徳科学の論文』7、二〇七ページ）

次に、創業と守成に関する廣池の文章を二つ続けて紹介します。

「創業は道徳なくとも出来ることあれど、守成は道徳なくては全く出来ませぬ。つまり金を儲けることは易いが、使う方法が今日までは分からなかったのであります」（『道徳科学の論文』8冊、二九二ページ）

★《創業・守成ともにその方法を同じくするものは亡ぶ》

東洋においては「創業は易く、守成は難し」という格言があります。これは今日統計をもって示さずとも、歴史的ならびに社会学的材料において十二分に明白な事実であります。それ故に世界に万世一系の家の極めて稀なることは当然でありましょう。

およそ創業は、**身体強健にして知識と勇気とに富み、しこうして甚だしき不道徳を行わざるもの**においては、必ず一つの事業に成功するものであります。その社会の地位を得るに至ることはやや難けれど、その金銭及び物質を利用して相当の富を成すことに容易にして、多くの知識もしくは勇気をも要せぬことであります。それ故に、**一朝社会に事変の起る場合には、たちまちにして大小**

幾多の成金を生ずるのであります。しこうして甚だしきは政治的成金を生じて、下級無学の人間、一朝にしてあるいは主権者となり、あるいは総理大臣となり、あるいは高位もしくは高官に昇ることがあります。しかるにかくのごとき実業界もしくは政治界の成金は、その自己の創業期間におけるところの自己の行動の動機・目的及び方法をもつて、その成功の暁に至るも依然これを踏襲するが故に、内憂外患たちまちに起こり来たつて、ほとんど一代を待たず、短きは五年十年の間において、失脚もしくは滅亡するものが多いのであります。

《成金》 わずかの時日のうちに金持ちになること

次に成金にあらずして極めて勤勉・力行・質素・儉約且つ多年の努力を積みて成功せる人々も、その成功の方法とこれを守成する方法とに区別あることを知らざるが故に、これまた短きは一代、永きも数代を保たざるものが多いのであります。しこうしてその最も永きものといえども数十代を越ゆることはないのであります。

なおこれを換言すれば、一時的成功、たとえば、金を手に入れて大もしくは小の成金になることは前記のごとくに比較的容易なことでありませうから、かかる大小の成功者は古今東西幾千万人あるとも計られぬほど多いのであります。しかしながら、これを守つて万世不朽に続いておるものは全世界において極めて僅少なる最高道德の実行者の子孫のほか極めて少ないのです。しかるに尋常人はもちろん、識者といえどもこの有様に心付かず、たまたま心付くものもあるもこれを守る方法を知らず、ついにみなかくのごとく滅亡し終わるのであります。これにつきて東洋にては「子孫のために美田を買うよりは書物を買つて貽（のこ）せ」というような格言もあり、あるいは「家憲を作つてこれを子孫に守らせよ」という教えもあり、その他種々の教訓あれど、いずれも聖人の真精神に遠きところの枝葉の教えにすぎぬものにて、万世不朽の家運を維持することは出来ぬものであります。

ことに事業を經營して富を得るためには技手・技師・教師もしくは顧問などを置きてその方法を練るもの多けれどその事業を守る方法、その家を守る方法もしくはその金を使用する方法を研究するものは極めて稀れであります。かくて自己の家を守りその運命を全うせんと欲するものは、あるいは宗教団体に寄付し、あるいは慈善事業に寄付し、あるいは学校を建て、あるいは社会事業を興し、あるいは学者を集めて社会事業を研究させる等、種々の事業に貢献して安心しておれど、その結果は決して予期のごとく現れないのであります。

元来、事業をなし財を集むるよりは、その財を最高道德的に有効に使用してその事業もしくは自己の子孫を永久に維持し、もつてその光輝（こうき）を全からしむることは人間の最後の勝利であるのに、多数の人々がこれに心付（づ）かず、且つこれに心付きてもその真の方法を体得せずして、その財もしくは努力を無効に使用するは惜しむべきことであります。要するに創業「ぎょうをばじむること」は、右のごとくに知・勇及び肉体の強健さえあれば、特殊の大故障なきかぎり必ず一時的成功をなすことは疑いないことではありますが、ひとたび成功してこれを守成するには、その人の財産及び地位に対してこれに応ずるだけの道德を必要とするのであります」（『道徳科学の論文』9冊、一八七ページ）

《道徳とは》 「人を益し、喜ばすにはどうすれば良いかと思う心が道徳なり」（日記2冊目）